

博士論文（要約）

論文題目 新古今時代の和歌とその展開

氏 名 尾葉石 真理

新古今時代の和歌とその展開 目次

凡例	1
序章	4
第一章 藤原定家	
第一節 藤原定家の和歌と漢詩文	10
第二節 藤原定家の和歌と『源氏物語』	26
第二章 村上源氏中院流	
第一節 源通親の『正治初度百首』	40
第二節 源通親の和歌と『万葉集』	67
第三節 久我通光——中世和歌へ	83
第三章 六条藤家及びその周辺	
第一節 藤原季経——その詠歌方法をめぐって	105
第二節 真観——新古今時代の和歌の継承	120
第三節 六条藤家の特徴——『玉葉集』における享受をめぐって	139
終章	153
現存和歌集成 村上源氏中院流諸家歌人・藤原季経・真観	155
初出一覧	261

本文

五年以内に出版予定。

参考文献一覧

〈複製・影印・翻刻・校本・索引〉

『新編国歌大観』（角川書店、一九八三～一九九二年）

『新編私家集大成』（エムワイ企画、二〇〇八年）

冷泉家時雨亭叢書『拾遺愚草上 中』『拾遺愚草下 員外』（朝日新聞社、一九九三・一九九五年）

国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書 文学篇第七卷『私家集二』（臨川書店、二〇〇一年）

和歌文学大系15『堀河院百首和歌』（明治書院、二〇〇二年）

新日本古典文学大系38（岩波書店、一九九八年）

日本古典文学大系3『古代歌謡集』（岩波書店、一九五七年）

『校本萬葉集』（岩波書店、一九九四年）

『西本願寺本萬葉集』（主婦の友社・おうふう、一九九六年）

日本古典文学影印叢刊22『顕註密勘』（日本古典文学会、一九八七年）

天理図書館善本叢書和書之部35『平安時代歌論集』（天理大学出版部、一九七七年）

『奥入』（日本古典文学会編、日本古典文学刊行会、一九七一年）

新編日本古典文学全集87『歌論集』（小学館、二〇〇二年）

日本古典文学大系65『歌論集 能楽論集』（岩波書店、一九六一年）

中世の文学『歌論集一』（三弥井書店、一九七一年）

新日本古典文学大系38（岩波書店、一九九八年）

歌論歌学集成第7巻『古来風舂抄 無名抄 西行上人談抄 後鳥羽院御口伝』（三弥井書店、二〇〇六年）

『神田本白氏文集の研究』（勉誠社、一九八二年）

『金沢文庫本 白氏文集』（大東急記念文庫、一九八三年）

和歌文学大系47『和漢朗詠集 新撰朗詠集』（明治書院、二〇一一年）

日本古典文学大系69『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』（岩波書店、一九六四年）

足利学校秘籍叢刊『文選』（汲古書院、一九七五年）

『校本本朝麗藻』（大曾根章介・佐伯雅子共編、汲古書院、一九九二年）

『本朝無題詩全注釈』（本間洋一、新典社、一九九四年）

新釈漢文大系110～112『詩経』（明治書院、一九九七～二〇〇〇年）

新釈漢文大系27・28・29『礼記』（明治書院、一九七一～一九七九年）

鎌倉時代物語集成5『松浦宮物語』（笠間書院、二〇〇〇年）

日本古典文学大系75・76『栄花物語』（岩波書店、一九六四～一九六五年）

中世の文学 第1期『今物語』（三弥井書店、一九七九年）

『大島本源氏物語』（角川書店、一九九六年）

新編日本古典文学全集 17『落窪物語』（小学館、二〇〇〇年）

新日本古典文学大系38『竹取物語 伊勢物語』（岩波書店、一九九七年）

日本古典文学大系67・68『日本書紀』（岩波書店、一九六五・一九六七年）

新日本古典文学大系 24 『土佐日記』(岩波書店、一九八九年)

新日本古典文学大系 51 『中世日記紀行集』(岩波書店、一九九〇年)

中世日記紀行文学全評釈集成 3 『源家長日記 飛鳥井雅有卿記事 春のみやまち』(勉誠出版、二〇〇四年)

新日本古典文学大系 39 『方丈記』(岩波書店、一九八九年)

『明月記』(国書刊行会、一九一一年)

図書寮叢刊『九条家本玉葉』(明治書院、一九九四年)

増補史料大成 23、25 『台記』(臨川書店、一九六五年)

〈研究書・研究論文〉

能勢朝次「六条家の歌人と其の歌学思想 (一) (二)」『国語国文の研究』一八・二五号、一九二八年三月・十月)

谷鼎『定家歌集評釈』(白日書院、一九三〇年)

石田吉貞『藤原定家の研究』(文雅堂、一九五七年)

井上宗雄「六条藤家の盛衰―その歌壇的地位の考察」『国文学研究』一五輯、一九五七年三月)

加藤睦「藤原定家「正治二年院百首」覚書―本歌取と掛詞の使用を中心として」『国語と国文学』六九巻五号、一九九二年五月)

家郷隆文「続古今和歌集研究―その外形をめぐって」『国語国文研究』十号、一九五七年四月)

井上宗雄「真観をめぐって―鎌倉期歌壇の一側面」『和歌文学研究』四号、一九五七年八月)

浜口博章「玉葉和歌集成立の背後―夫木和歌抄との関係」『国語国文』二十六巻十一号、一九五七年十一月)

久保田淳「為家と光俊」『国語と国文学』三五巻五号、一九五八年五月)

次田香澄「玉葉集の形成」『日本学士院紀要』二二巻一号、一九六四年三月)

長谷完治「漢詩文と定家の和歌」『語文』二六輯、一九六六年七月)

糸賀きみ江「玉葉集における新古今歌人の位置」『共立女子短大紀要』十号、一九六六年十二月)

有吉保『新古今和歌集の研究』(三省堂、一九六八年)

山口達子「俊成女と通具」『大谷女子大学紀要』三号、一九六九年十月)

山田清市『作者分類夫木和歌抄 研究索引篇』(風間書房、一九七〇年)

寺本直彦「中世歌壇と源氏物語」『源氏物語受容史論考』風間書房、一九七〇年)

寺本直彦『源氏物語受容史論考』(風間書房、一九七〇年)

萩谷朴『松浦宮全注釈』(若草書房、一九八七年)

萩谷朴『松浦宮物語』(角川書店、一九七〇年)

樋口芳麻呂「遠島歌合の通光の歌」『和歌史研究会会報』四〇号、一九七〇年十二月)

桑原博史「源通親伝素描」『中古文学論考 山岸徳平先生頌寿』(有精堂、一九七二年)

品川和子「擬香山模草堂記について―附成實堂文庫本文大体の原本は源通親の撰か」『学苑』三八五号、一九七二年一月)

- 福田秀一『中世和歌史の研究』（角川書店、一九七二年）
- 安井久善『藤原光俊の研究』（笠間書院、一九七三年）
- 丸谷才一『後鳥羽院』（筑摩書房、一九七三年）
- 久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、一九七三年）
- 糸賀きみ江『新古今の女歌人』（『和歌文学の世界 第一集』和歌文学会編、笠間書院、一九七三年）
- 品川和子『源通親について―その人と作品』（『学苑』三九〇号、一九七三年六月）
- 花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九七四年）
- 錦仁『藤原定家の本歌取―『伊勢物語』歌との関係』（『和歌文学研究』三一号、一九七四年六月）
- 菊池仁『玉葉集における定家受容―六百番歌合の負歌をめぐって』（『國學院雑誌』七五卷八号、一九七四年八月）
- 上條彰次『誹諧歌と俊成』（『国語国文』四四卷八号、一九七五年八月）
- 森本元子『俊成卿女の研究』（桜楓社、一九七六年）
- 久保田淳『夢のうきはし―新古今和歌集』（『国文学 解釈と鑑賞』四二卷一〇号、一九七七年）
- 鈴木徳男『建保期の藤原知家』（『中世文芸論稿』三号、一九七七年五月）
- 橋本不美男『正治百首についての定家・俊成勘返状』（『和歌史研究会会報』六五号、一九七七年十二月）
- 益田勝実『夢の浮橋』のイメージ』（『日本文学』二七卷二号、一九七八年）
- 久保田淳『源通親の文学―その和歌について』（『論叢王朝文学』笠間書院、一九七八年）
- 水川喜夫『作者の詩心と作品の意義』（『源通親日記全釈』笠間書院、一九七八年）
- 鈴木徳男『貞永期の藤原知家』（『国文学論叢』二三輯、一九七八年一月）
- 久保田淳『源通親の文学―動乱期における三篇の『記』について』（『文学』四六卷二号、一九七八年二月）
- 久保田淳『新潮古典集成 新古今和歌集 上』（新潮社、一九七九年）
- 糸賀きみ江『玉葉集における西行の歌』（『中世の抒情』笠間書院、一九七九年。『文芸研究』五十号、一九六五年六月初出）
- 竹下豊『六条藤家をめぐって―歌道家の成立と展開』（『女子大文学』三〇号、一九七九年三月）
- 松村雄二『飛鳥井雅経と藤原秀能』（『国文学 解釈と鑑賞』第四十四卷第十号、一九七九年九月）
- 後藤重郎『通具と俊成卿女―新古今和歌集所収歌をめぐって』（山崎敏夫編『中世和歌とその周辺』笠間書院、一九八〇年）
- 益田勝美『こころとことば』（『国文学』第十五卷十三号、一九八〇年十月）
- 久保田淳『源氏物語』と藤原定家、親忠女及びその周辺』（『古代文学論叢』第八輯『源氏物語と和歌 研究と資料』武蔵野書院、一九八二年）
- 武久堅『源通光―現存和歌集成（稿）』（『広島女学院大学 国語国文学誌』一二号、一九八二年十二月）
- 谷山茂『歌合をめぐる六条家と御子左家』（谷山茂著作集4『新古今時代の歌合と歌壇』

角川書店、一九八三年。初出『国語国文』九卷四号、一九三四年四月）
 富樫よう子「藤原定家における漢詩文の摂取―文治建久期を中心に」（『国文目白』二二号、一九八三年三月）
 望月俊江「源通光―その歌人としての生涯」（『立教大学日本文学』五〇号、一九八三年七月）
 久下晴康「『夢の浮橋』論―イメージ言語の再生あるいは摂取の方法」（『学苑』五二九号、一九八四年）
 寺本直彦『源氏物語』とその受容（右文書院、一九八四年）
 寺本直彦『源氏物語受容史論考』続編（風間書房、一九八四年）
 福田秀一「夫木抄」（『和歌文学講座 第四卷』桜楓社、一九八四年）
 部矢祥子「源通具の撰歌状況及び和歌について」（『高野山大学国語国文』九卷十一号、一九八四年十二月）
 久保田淳『訳注 藤原定家全歌集』上（河出書房新社、一九八五年）
 赤羽淑「十題百首」（『韻歌百二十八首和歌』）（藤原定家の歌風』桜楓社、一九八五年）
 久保田淳「古典文学のキーワード エピローグ―半ば反語的な」（『国文学』三十巻十号、一九八五年九月）
 本間洋一「王朝漢詩の表現覚書―王朝詩と白詩と」（『和漢比較叢書 第三卷中古文学と漢文学Ⅰ』和漢比較文学会、汲古書院、一九八六年）
 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期〔改訂新版〕』（明治書院、一九八七年）
 長谷完治『和漢比較文学叢書 中世文学と漢文学』（和漢比較文学会編、一九八七年、汲古書院）
 部矢祥子『源通具全歌集』（思文閣出版、一九八七年六月）
 井上宗雄「六条藤家の人々」（『平安後期歌人伝の研究 増補版』笠間書院、一九八八年）
 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究（増補版）』（笠間書院、一九八八年）
 石川泰水「通う調べ、通う心―定家と同時代歌人」（『国文学 解釈と鑑賞』三三巻一三号、一九八八年）
 目良有子「源通親の和歌」（『甲南女子大学大学院論叢』一〇号、一九八八年一月）
 部矢祥子「千五百番歌合時の通具とその和歌をめぐって」（『中世文芸論稿』十一号、一九八八年三月）
 佐々木孝浩「六条藤家から九条家へ―人麿影と大嘗会和歌」（『芸文研究』五三号、一九八八年七月）
 佐藤恒雄「通具俊成卿女五十番歌合の成立について」（『中世文学研究』一四号、一九八八年八月）
 加藤睦「藤原清輔の『久安百首』について」（『東京水産大学論集』第二四号、一九八八年十一月）
 岩崎禮太郎「源氏物語をふまえた和歌―千五百番歌合における定家と公経の歌を中心として」（『源氏物語』を読む』佐藤泰正編、笠間書院、一九八九年）
 藤平泉「土御門家の歌人たち」（『日本大学人文学研究所研究紀要』三七号、一九八九年三月）
 佐々木孝浩「歌林苑の人麿影供（一）」（『銀杏鳥歌』三号、一九八九年十二月）

- 佐々木孝浩「人麿影供年譜稿―鎌倉時代篇」(『三田国文』一二号、一九八九年十二月)
- 小林強「反御子左派旗上げ前後の歌壇について―寛元四年七月為家勸進「日吉社五十首」及び光俊勸進「住吉社卅六首」を中心に」(『東山学園研究紀要』三五号、一九九〇年三月)
- 佐々木孝浩「歌林苑の人麿影供(二)」(『銀杏鳥歌』四号、一九九〇年六月)
- 佐々木孝浩「歌林苑の人麿影供(三)」(『銀杏鳥歌』五号、一九九〇年十二月)
- 片桐洋一「古今和歌集と藤原定家」(『古今和歌集の研究』明治書院、一九九一年)
- 久富木原玲「源氏物語取りの和歌―式子内親王の場合」(『源氏物語講座八 源氏物語の本文と受容』今井卓爾ほか編、勉誠社、一九九二年)
- 橋本義彦『源通親』(吉川弘文館、一九九二年)
- 佐藤明浩「題の拡充と題詠の深化―恋題を中心に院政期から新古今前後まで」(『和歌文学の世界15『論集<題>』の和歌空間』笠間書院、一九九二年)
- 深津睦夫「組題の世界―新古今以後を中心に」(『和歌文学の世界15『論集<題>』の和歌空間』笠間書院、一九九二年)
- 田中初恵「定家の和歌における源氏物語受容」(『源氏物語講座八 源氏物語の本文と受容』今井卓爾ほか編、勉誠社、一九九二年)
- 高崎由理「源通光年譜」(『中世和歌』一九号、一九九二年十月)
- 佐々木孝浩「後鳥羽院家隆「俊頼影供」小考(一)」(『銀杏鳥歌』九号、一九九二年一月)
- 久保田淳『中世和歌史の研究』(明治書院、一九九三年)
- 小島吉雄『新古今和歌集の研究』(星野書店、一九四四年初出。和泉書院、一九九三年再録)
- 佐々木孝浩『『とはずがたり』の人麿影供―二条の血統意識と六条有房の通光影供をめぐって』(『国語と国文学』七〇巻七号、一九九三年七月)
- 佐藤恒雄「新古今和歌集の修辭と表現」(『和歌文学講座第六卷『新古今集』勉誠社、一九九四年一月)
- 上野順子「正治・建仁期の影供歌合について―土御門通親を中心に」(『和歌文学』六七号、一九九四年一月)
- 浅田徹「六条家―承安―元暦頃を中心に」(『平安後期の和歌』和歌文学論集編集委員会、風間書房、一九九四年)
- 辻勝美「新進歌人群」(『和歌文学講座第六卷『新古今集』勉誠社、一九九四年)
- 岩佐美代子「玉葉集と栄花物語」(『国文鶴見』二九号、一九九四年十二月)
- 岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈 上』(笠間書院、一九九六年)
- 中川博夫「校本『簸河上』」(『国文学研究資料館紀要』二二号、一九九六年三月)
- 岩佐美代子「玉葉集の定家―勅撰全入集歌を見渡して」(『国文鶴見』三十一号、一九九六年十二月)
- 佐々木孝浩「人麿の信仰と影供」(『万葉集の諸問題』国文学研究資料館編、臨川書店、一九九七年)
- 藤平春男『新古今歌風の形成』(明治書院、一九六九年初出。『藤平春男著作集第一卷』笠間書院、一九九七年再録)

近藤香「源通具の初期の和歌について」(『立正大学大学院日本語・日本文学研究』創刊号、一九九七年三月)

中川博夫『簀河上』を読む(『国語と国文学』七四卷一一号、一九九七年十一月)

藤平泉「源通親流の文芸意識―昨夜年代記や候ける」(『語文』九九号、一九九七年二月)

三木紀人『講談社学術文庫 今物語』(講談社、一九九八年刊)

安田徳子「式乾門院御匣について」(『聖徳学園岐阜教育大学国語国文学』十七号、一九九八年三月)

川上新一郎『六条藤家歌学の研究』(汲古書院、一九九九年)

北原元秀「人麿影供と院政期歌壇」(『古代文学』五一卷四号、一九九九年四月)

佐藤恒雄『藤原定家研究』(風間書房、二〇〇一年)

田仲洋己「夢の浮橋の系譜学―藤原定家の御室五十首詠をめぐって」(『叢書想像する平安文学 夢そして欲望』勉誠出版、二〇〇一年)

田渕句美子『中世初期歌人の研究』(笠間書院、二〇〇一年)

田野慎二「正治二年十月十二日通親家影供歌合の「叡感」について―後鳥羽院の和歌賞詞をめぐる一考察」(『国文学攷』一七一号、二〇〇一年九月)

田渕句美子「俊成卿女伝記考証―『明月記』を中心に」(『明月記研究』六号、二〇〇一年十一月)

渡邊裕美子「通具俊成卿女歌合」について―俊成歌供出説に及ぶ(『国語国文』七〇卷一二号、二〇〇一年十二月)

岡野友彦『中世久我家と久我家領荘園』(続群書類従完成会、二〇〇二年)

佐々木孝浩「影供歌合前史」(『院政期文化論集 第二卷 言説とテキスト学』院政期文化研究会、森話社、二〇〇二年)

芦田耕一「藤原清輔の述懐歌―出家と関わって」(『古代中世和歌文学の研究』和泉書院、二〇〇三年)

川平ひとし『中世和歌論』(笠間書院、二〇〇三年)

藤平春男「新古今集と源氏物語―定家の本歌取と源氏物語の引歌」(『藤平春男著作集』第五卷、笠間書院、二〇〇三年)

芦田耕一『六条藤家清輔の研究』(和泉書院、二〇〇四年)

久保田淳『久保田淳著作選集 第二卷 藤原定家』(岩波書店、二〇〇四年)

久保田淳『藤原定家』(『久保田淳著作選 第二卷』岩波書店、二〇〇四年)

谷知子『中世和歌とその時代』(笠間書院、二〇〇四年)

近藤香「『千五百番歌合』の源通具の和歌―他文献への採録をめぐって」(『立正大学大学院日本語・日本文学研究』七号、二〇〇四年三月)

須田亮子『『とはずがたり』後深草院二条と五部大乘経の書写供養―祖父源通光の影響をめぐって』(『国文論藻』三号、二〇〇四年三月)

佐々木孝浩「後鳥羽院歌壇「影供歌合」考」(『国語と国文学』八一卷五号、二〇〇四年五月)

芦田耕一「藤原清輔の「南殿の桜」詠をめぐって―二条天皇とのかかわり」(『島大言語文化』十七号、二〇〇四年八月)

- 小川剛生『高倉院殿島御幸記』をめぐって』『明月記研究』九号、二〇〇四年十二月）
- 中村文『後白河院時代歌人伝の研究』（笠間書院、二〇〇五年）
- 芦田耕一「藤原清輔詠の『和漢朗詠集』の漢詩摂取」『島大言語文化』十九号、二〇〇五年九月）
- 下浅千穂「源通親『高倉院升遐記』成立考―狂言綺語の戯れ」『仏教文学』三〇号、二〇〇六年三月）
- 兼岡理恵「真観と風土記―十三世紀風土記受容の一側面」『東京大学国文学論集』一号、二〇〇六年五月）
- 井上宗雄『中世歌壇と歌人伝の研究』（笠間書院、二〇〇七年）
- 渡邊裕美子『最勝四天王院障子和歌全釈』（風間書房、二〇〇七年）
- 佐藤恒雄『藤原為家研究』（笠間書院、二〇〇八年）
- 川平ひとし『中世和歌テキスト論―定家へのまなざし』（笠間書院、二〇〇八年）
- 田仲洋己『中世前期の歌書と歌人』（和泉書院、二〇〇八年）
- 夫木和歌抄研究会『夫木和歌抄 編纂と享受』（風間書房、二〇〇八年）
- 渡邊裕美子『通具俊成卿女歌合』注釈抄』『文芸と批評』十卷八号、二〇〇八年十一月）
- 村尾誠一『中世和歌史論―新古今和歌集以後』（青簡舎、二〇〇九年）
- 野村朋弘『久我家文書』一号文書の再検討』『古文書研究』六七号、二〇〇九年十月）
- 藤川功和『春日若宮社歌合』の諸相』『国文学攷』二〇四号、二〇〇九年十二月）
- 田渕句美子『新古今集―後鳥羽院と定家の時代』（角川学芸出版、二〇一〇年）
- 渡邊裕美子「俊成卿女の『源氏物語』摂取」『新古今時代の表現方法』笠間書院、二〇一〇年）
- 渡邊裕美子『新古今時代の表現方法』（笠間書院、二〇一〇年）
- 加藤睦「空をながめる和歌―藤原定家の「閑居百首」を読む」『水声通信』三三号、二〇一〇年七月）
- 渡邊裕美子『歌が権力の象徴になるとき―屏風歌・障子歌の世界』（角川学芸出版、二〇一一年）
- 渡部泰明「藤原定家の方法」『文学』十二・一月号、二〇一一年二月）
- 野本瑠美「藤原隆季の和歌活動」『島大言語文化』三十二号、二〇一二年三月）
- 米田有里「源通具に関する一考察―初学期を中心に」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』二二号二、二〇一三年三月）
- 吉野朋美『後鳥羽院とその時代』（笠間書院、二〇一五年）
- 寺島恒世『後鳥羽院和歌論』（笠間書院、二〇一五年）
- 米田有里「源通具の試み―『千五百番歌合』恋・雑部の歌」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』二三号二、二〇一五年三月）

論文内容要旨

本論文は、新古今時代の和歌における詠歌方法と、その後の展開を解明することを目的とする。「新古今時代」とは、『新古今和歌集』（以下、『新古今集』と略す）成立前後の時代を指すが、これまでの研究では『新古今集』が藤原定家を中心撰者として成立したと、またその歌風は定家の確立した新風歌風が基盤となっていることから、定家の時代と捉えられてきた。その結果、定家の歌風の形成とその影響に注目が集まり、後鳥羽院や御子左家歌人たちなど定家に近い歌人たちについての研究が積み重ねられる一方で、その影響の見られない歌人たちは「旧派」として軽視される傾向にあったのが新古今時代の和歌研究史であるといえる。しかし定家の歌が後鳥羽院に認められる以前、歌人たちはそれぞれ小集団を形成して独自の歌風を模索していたことがわかつている。それらは『新古今集』には取り込まれなかったが、『新古今集』以後の勅撰和歌集や私撰和歌集に取り込まれ、受容された例のあることから、定家を中心とするものとは別の影響力を考え得る。そこで本論文では、新古今歌壇形成前後に成立した和歌について分析を加えるとともに、それらが後代どのように受容され受け継がれていったのかについて検討し、全体像としての中世和歌史を把握しようとしたものである。

第一章では、新古今歌風の基礎となった定家の和歌について分析を加えた。定家の和歌の特徴や詠歌方法の特異性を捉えることで、他歌人の特徴・方法と比較検討をするためである。

第一節では漢詩文摂取、第二節では『源氏物語』摂取を取り上げた。いずれも当代特に重視された手法であり、他歌人も多用した方法であることから、定家の方法の特異性を峻別する目的で行った。結果として明らかになったのは、定家の漢詩文摂取は連想と連想を繋げ、様々な作品を引き寄せて詠歌を行っていたこと、発想の展開力にこそ定家の特異性があったことである。同様のことは『源氏物語』摂取にも見られたが、『源氏物語』摂取の場合は特に、『源氏物語』と現実的な実感や自身の実詠歌とを繋げて詠歌を行っていた。つまり物語世界を現実と同じ位相に位置するものと捉えることで、物語と現実の区別なく内外を繋げ得ていた。以上のことから、定家の和歌の特色は一つの趣向・発想を起点として連想を広げ、様々な作品へと繋げて世界観を深化させる点にあることを指摘し、またそのような自由で柔軟な発想を保つため、固定概念を打ち破る努力が定家の注釈書等にも見られることも併せて指摘した。

第二章では、大臣を輩出した権門、村上源氏の源通親と久我通光に焦点を当てた。

まず第一節・第二節では通親を扱った。通親は後鳥羽院最初の詠歌である大内の花見にも同席するなど、早い段階から後鳥羽院の和歌行事に深く関わっていたことが知られており、一歌人に過ぎなかった定家とは立場が異なる。しかしその和歌は、これまでの研究では古めかしく、定家とは作品で対等となり得なかったとされてきた。そこで通親の詠歌特徴・方法について検討を行った結果、通親は定家とは異なり、和歌や漢詩文、『源氏物語』といった作品中に存在する内部世界を詠むのではなく、作品の外側にこそ現実を認めるような詠み方を行っていたことが判明した。つまり各作品は現実に基づく断片でしかないも

のと捉え、それを組み合わせ、また切り口を変えることで自分なりの現実認識を表現するのである。そのような詠み方は記録に見える官人としての彼の言動とも重なる。通親は、和歌においても官僚としての己を活かし、詠歌を行っていたことが判明した。そのような通親の和歌は『新古今集』にはほとんど入集しなかったが、後代においては規範として仰がれ尊重されていることを指摘し、定家とは異なるものの、その後へと続く流れを形成しているものと考察した。

第三節では久我通光を扱った。通光は新古今歌壇成立後に詠歌を始めた人物であるため、定家が歌壇の中心となつて「新古今歌風」を形成していく時期に和歌を詠み始めている。その和歌はこれまで、定家の和歌を真似ようとして真似られなかった、その他大勢の新進歌人の一人として捉えられ、「真の理解に至らぬ技術主義」として軽視されてきた。しかし分析の結果明らかになったのは、通光は趣向全体を捉える見方によって歌を詠むなど、父・通親と近い点を確認できること、その一方でその表現性は父とは異なり、情景を感覚的に捉えて新たな表現を創出しようとしていたことである。定家は通光のような詠み方を批判しているが、通光の表現は衆議判の歌合では高く評価されており、また後代の歌人にも継承されたことが認められる。以上のことから、通光の和歌は父から受け継いだ方法を用いつつ新たな和歌表現を生み出そうとしていたこと、そしてそれは新古今歌壇における、定家とは異なる新たな潮流であつたものと捉えた。その潮流は承久の乱に敗北した後鳥羽院が隠岐に流されたことで途絶し、歌壇の中心は定家に戻ったが、その流れは水面下において中世和歌へと受け継がれていくとの見通しを立てた。

第三章では六条藤家及びその周辺について考察した。六条藤家とは新古今時代において俊成・定家ら御子左家と激しく対立した歌の家であるが、近年はその歌壇における地位の変動や歌道家としての在り方などが注目される一方で、彼らの和歌を扱った研究は少なく、常に定家らの和歌と比較して「保守的」で「旧派」だとされてきた。しかし歌の家の人間として指導に当たり、他歌人に影響を及ぼしたはずの彼らについて検討することは、新古今時代と中世の繋がりを考える上でも不可欠である。

そこで第一節では、俊成・定家の批判を最も多く浴びている新古今時代の六条藤家歌人である季経を取り上げ、六条藤家歌人共通の方法の解明、また定家との比較検討を行った。結果明らかとなった季経の詠歌方法は、異なる趣向と趣向を繋げ、その組み合わせの新奇さを目指す点に特徴がある。対比構造を好むのは六条藤家共通の傾向であるが、季経はさらに新奇さを目指し、極端な組み合わせも試みていた。しかしそれは同じ地平にある発想同士を重ねて一首を深化させる定家とは異なり、繋がらない発想同士を無理矢理に繋げて横の広がりを求める方法で、定家はそれに拒否反応を示していた。六条藤家が新古今歌壇で認められなかったのは、そのような定家らとの和歌観の相違に由来するものであることを明らかにした。

さらに第二節では真観を取り上げた。真観は初学期は定家に師事していたが、定家没後は御子左家歌人である藤原為家と対立し、六条藤家歌人である藤原知家らと御子左家に反旗を翻した人物である。故にこれまでは「反御子左派」として扱われ、その和歌についても為家が推進した穏当な歌風とは異なる、奇を衒った試みばかりが注目されてきた。しかしその詠歌方法を歌歴に沿って検討したところ、真観は季経の方法を自らの詠歌方法として採用しつつ、言葉や表現自体は新古今時代の和歌全般を規範としていたことが確認でき

た。つまり真観は定家らが確立した新古今和歌を仰ぐべき指標と位置づけているものの、詠歌方法は師である定家に拠らず、六条藤家歌人に拠っていることになる。六条藤家歌人の方法は新古今歌壇では定家らに批判され排斥を免れ得なかったが、その後の真観らには継承されていることが認められた。

第三節では、『新古今集』から百年以上経た鎌倉時代後期の正和元年に成立した『玉葉和歌集』（以下、『玉葉集』）に焦点を当て、そこに入集した六条藤家歌人の歌について考察した。『玉葉集』は、御子左家から分派した京極家及びその一派（京極派）による勅撰和歌集で、撰者の京極為兼は定家の曾孫に当たる。これまでの研究で、『玉葉集』は叙景歌に特徴があること、また定家の歌を二番目に多く採用するなど、御子左家歌人たちの流れを汲むものであることが指摘されていた。しかし実際の『玉葉集』入集歌を確認すると、他の撰集が取らないような六条藤家歌人詠も複数取り込んでいる。御子左家歌人詠を重視したはずの『玉葉集』が、定家に非難されることの多かった六条藤家歌人の歌を入集させるのはなぜなのか、『玉葉集』と六条藤家の接点はどこにあったのかを考察した。その結果明らかになったのは、『玉葉集』は六条藤家の日常詠を特に多く取り入れていること、そして持明院統と大覚寺統の両統迭立の時代に成立した『玉葉集』は、日常詠によって自らの文化の高さと正統性を主張していたことである。定家は歌に付随する状況を排して作品そのものの価値を見つめ、その芸術性を高めようとする傾向があったが、六条藤家は和歌によって日常を表現しようとする態度が見られた。そしてそれと同じものが『玉葉集』にも存在することを解明した。それは新古今時代においては定家らによって否定された和歌の価値観であるが、その価値観が中世において再び認められ、六条藤家から『玉葉集』へと継承されたことを意味する。これにより、定家以外の新古今時代の和歌が中世和歌へと繋がっていくことに裏付けを得た。

以上によって本論文は、中世和歌史には定家を本流とするものとは別の、新古今時代から中世へと続く隠れた潮流が存在することを証明した。そして、定家を中世和歌の中心として位置づけてきた従来の研究ではほとんど研究対象にされてこなかった周縁の歌人や、その和歌を擲き上げることによって、定家らとは別の中世和歌へと続く系譜をたどることができることを明らかにしたものである。